

連載小説「女装強要妄想ノート」

7. 4月第4週（上） 「男装から少しづつ女児女装させられる」

（1）

「真弓、駅までお出かけするから、一緒にいらっしゃい」

ゴールデンウィークも目前に迫った、4月下旬の日曜日。

母親の言葉に、真弓は恐る恐る尋ねる。

「そ、それって、まさか、女の子の、格好で……？」

雛祭りから始まった、女装生活。それも女子小学生の制服やら、卒服やら、入学スーツやら、男子高校生はまず着ることのない女児服の数々を着せられてきたが、あくまで家の中か、せいぜい玄関先に限られていた。

しかし先週、パンツルックとはいえないに外に連れ出され、美容室で女の子らしい三つ編みにされた。いまも朝から妹のおさがり制服——赤いラインが入ったセーラー服を着て、長い三つ編みにリボンのヘアゴムがついているのだが、それはさておき。

（先週も女児服女装で外に連れ出されたけど、まさか今日は、女児服で駅前に連れ出されるんじゃ……！）

それは決して根拠のない不安ではない。なにしろ真弓に降りかかった一連の女装難の原因ともなった——と言うにはいささか自業自得だが、「こんなシチュエーションで女装させられたい」という妄想を書き連ねた例のノートにも、しっかりと書かれていることなのだ。

「女児服を着せられて、駅前に連れ出される」

今までの流れを考えれば、真弓がおびえるのも無理からぬことであった、が——

「いいえ。高校の男子制服を着てらっしゃい」

「え……い、いいの？」

「ええ。最初から女児服で駅前ってのも酷だろうし、まだ女装しなくていいわ」

「ほっ……って、まだ！？ いつかは女児服で、え、駅前に——」

いっしゅん胸をなでおろすものの、すぐに聞きとがめる真弓。しかし母親ははぐらかすように笑うばかりで、

(うう、いつかは女児服で駅前を連れまわされるってことか……)

(ま、まあ、今日はふつうに男子制服で行かせてもらえるみたいだから、気が変わらないいうちに早く着替えて来よう)

さっそく真弓は自室に戻って、男子制服に着替える。

男子用のシャツに、紺の上下と水色のネクタイ。着始めてからすでに1年以上になっているはずの男子制服は、いまだにブカブカで似合っていない。

手早く準備を済ませ、最後に念のために鏡を覗き込んだところで——ヘアゴムでツインテールにしたままだったことに気付く。慌てて髪をほどき、学校に行くときと同じように後ろで束ねたところで、

「ふたりとも、出かけるわよ」

「はーい」

下から母親に呼ばれ、真弓は妹の亜弓とともに、玄関に降りていった

*

母親の運転する車で駅までやってきた兄妹は、駅地下の駐車場で車を降りた。

最初に向かったのは、駅ビルにほど近いシューズ専門店だった。

まずは亜弓のシューズ——女子用スポーツシューズ売り場へ。

「やった、A b b i d a s の新作出てる！」

彼女はお洒落なミュールやパンプスには目もくれず、熱心にスニーカーを選び始めた。

(可愛いシューズも選べばいいのに……って、オレが考えることじゃないか)

ついつい女の子らしい商品に目が行ってしまう自分に苦笑していると、

「さ、亜弓はまだしばらくかかりそうだし、真弓はこっちにいらっしゃい」

「うん」

母親に誘導され、素直についてゆく。

スポーツシューズ売り場を離れ、男子用シューズ売り場へ——行くかと思いきや、その前を素通りして歩き続ける母親に、

「え？ 母さん、どこに……？」

「ふふつ、こっちよ」

「こっち……？ って、ここは……！」

戸惑いながらもついていった先に並ぶ商品を見て、真弓はようやく今回の「おでかけ」の主旨を悟る。

ピンクや水色など、パステルカラーのスニーカー。

ハートのバックルやリボンがついた、フォーマルなストラップシューズ。

他にもローヒールのパンプスに、ファー付きのブーツ、ジュートウェッジのサンダルなど

(女児用の、シューズ売り場……！)

(女装はしないってだけで、今日来たのは、オレの女装用の服や靴を選ぶのが目的だったんだ——！)

愕然と凍りつく真弓だったが、すでに彼は罠にかかった獲物も同然。羞恥に満ちた「お出かけ」は、やっと始まったばかりであった。

(2)

たくさんの女児シューズの前で立ち尽くす真弓に、

「さ、真弓。可愛い靴を選びましょうね」

母親が、罠にかかった獲物を見る目で微笑みかけた。

「今まででは亜弓ちゃんのおさがりで済ませてきたけど、これからお外に出ることが多くなるんだから、いつまでも亜弓のおさがりってわけにはいかないでしょ？ 新しいのを買ってあげるから、好きなのを選びなさい」

「う、ううつ……！」

「小学校の女子制服に合わせるフォーマルなシューズと、ふだんの女児服に合わせるカジュアルなスニーカー、とりあえず2足もあれば充分かしら。それとも、あっちのサンダルとかも気になる？」

母親が話しかけてくるが、周囲にちらほらと見えるお客様や店員の視線が気になって、まともに頭に入って来ない。彼らの顔には一様に、「あの男子高校生の子、女の子用の靴を買うの？」「小学校の女子制服とか、女児服とか着てるのかしら」と書いてある。

(ハメられた……！ これなら最初から女児服の方がマシなくらいじゃないか……！)

完全に女の子のふりをするのも恥ずかしくはあるが、ここまで注目はされないだろう。真弓にあえて男子高校生の格好をしたまま、女児用シューズや女児服を選ばせる——それこそが、今回の「お出かけ」の主眼だったのである。

「さあ、まずはシューズね。こっちの棚にあるから、いらっしゃい」

「う、うん……」

真弓はフォーマルシューズ売り場へと近づいて、そこに並ぶ女児シューズを見下ろす。

つま先やストラップにリボンがついたもの、バックルがハートや花の形になっているもの、履き口に白いラインが入っているもの。色は黒が中心だが、白やピンクのものもいくつか置かれている。

(これを、オレが——！)

制服や女児スーツを着せられた時も、女児用シューズを履いてはいる。しかし用意されたものを履くのと、改めて女児シューズ売り場まで来て、自分で選んで購入するのは、恥ずかしさのレベルが段違いだ。

なによりも、

(シューズを買ってもらうってことは、オレ、このシューズを履いて——つまりはこのシューズに合わせた女児服を着て、外を歩くことになるわけで……！)

今すぐこの場から逃げ出したくなるほどの恥ずかしさに襲われる真弓。

しかし同時に、女児女装外出の予兆に、男子制服のズボンの内側で彼の劣情が蠢き始める。(うつ……考えてたら、チンコがむずむずしてきた……！)

勃起こそしていないものの、真弓の理性は徐々に「女の子の服を着て気持ちよくなる」ことに触まれて、視線は目の前のシューズに吸い寄せられてゆく。

どれもこれも可愛らしい、女児用シューズ。

これを履いて、女児服を着て、髪形も女の子らしくして外出したら——いったいどれほど恥ずかしく、気持ちいいだろう。

「ふふっ……」

母親は、息子の心の変化を見透かして笑う。

どれもこれも可愛らしいシューズで目移りしてしまう。まず目につくのはピンクのシューズだったが、

(セーラー服と合わせることを考えると、あんまり明るい色は合わないかな……白もピンクも可愛いけど、今回はスタンダードな黒にしよう)

(あとは飾りのついたものだけど——リボンに、バックルに、うう、悩む……)

(シンプルなほうがいいかな……それとも、ちょっと恥ずかしいけど、一目でパッと女の子用のだってわかるようなデザインに……)

花の形に、キラキラ輝くストーンが並んだバックルのシューズ。セーラー服と合わせても違和感がなく、それでいて一目でわかる少女らしさがある。

(こ、これは……さすがにちょっと、恥ずかしいかも……！)

真弓が履いている自分の姿を想像して硬直していると、母親はその視線の先をすぐに察して、

「ふうん、それがいいのね？」

「えっ……ち、ちがっ、見てただけで、欲しいわけじや……！」

「恥ずかしがらなくてもいいわよ。すみません、試着をお願いしたいんですけど」

近くにいて様子をうかがっていた店員を呼ぶ母親に、真弓は大慌てに慌てるが、

「試着ですね、かしこまりました」

すでに事情を察し、出番を待ち構えていた店員はすぐにやって来てうなづく。彼女が内心で舌なめずりしているのが、目に見えるようだった。

「お召しになるのは、息子様ですか？」

「ええ、まずはこちらのフォーマルシューズと、それからスニーカーも欲しいんです」

「かしこまりました。それではお履き物を脱いで、ご試着ください。女の子用なので、表示より少し大きめのサイズを——」

(ううつ、男子制服を着てるせいで、逆に恥ずかしい思いをするなんて……！)

あれやこれやと話し始める母親と店員の勢いに押され、真弓はあれやこれやと女児用シューズやスニーカーを試し履きさせられ——さらにしばらくして妹の亜弓も参戦したのだった。

(3)

「ね、ねえ、元の靴を履かせてよっ……！」

シューズ店での買い物を済ませて大通りに出たところで、真弓は母親に抗議する。

しかし思いがけず大きな声が響き、通行人の注意を引いてしまったことの気づいて、慌てて赤い顔で口を押さえた。

「う、ううつ……！」

視線を落として、羞恥の源——男子制服のズボンから覗く、自分の足を見つめる。

白とピンクを基調にした、女児用のスニーカー。しかも紐で結ぶタイプではなく、足の甲をマジックテープで留める幼いデザインのものである。高校の男子制服とはおよそミスマッチで、通りすがる人々の目を惹いているのだ。長い髪とも相まって、「妹が兄の制服を借りてきている」感がいっそう強くなっている。

「男子制服のせいで、逆に恥ずかしい……！」

真っ赤な顔でつぶやく真弓に、

「ふふつ。なら、次の場所に行きましょうか」

「な、ならってどういうこと？」

「決まってるじゃない。男子制服で女の子用のスニーカーを履いているのが恥ずかしいのなら、上から下までぜんぶ女の子の服を着れば、もう恥ずかしくはないでしょう？」

「そ、それって本末転倒じゃん！　だいいち、女の子の格好をするのもじゅうぶん恥ずかし——ああっ、待ってよお！」

抗議の声は完全に無視されて、早くも駅に向かって歩き出した母親と妹の後を、真弓は慌てて追いかける。

そして向かった先は――

「まずは服の前に、下着から揃えないとね」

「なんで！？」

駅に近い大型スーパーの、2階下着売り場。女児用下着が陳列された一角に連れていかれて、真弓は悲鳴を上げた。

ハンガーに吊るされて並ぶ、キャミソールに、タンクトップに、ショーツ。白無地にリボンがついただけのシンプルなものから、ビビットカラーのロゴやイラストが入ったポップなもの、花柄やギンガムチェック、フルーツ柄などのキュートなもの、ピンクやラベンダーを基調にした「ゆめかわ」風のものまで――ここ1ヶ月ほど、日常的に女児女装させられている真弓でさえも、思わず鼻白んでしまう。

しかし一方で、

(か、可愛い……！)

色も柄もとりどりの下着が目の前に並んでいるのを見ていると、これを着せられることを想像して、股間がみなぎってしまう。

「女児用下着売り場で、自分用の下着を選ばされる――」

例の「女装妄想ノート」にもそんな一文があり、実際にこの場面を想像して抜いたこともあるのだが、実際に連れて来られる恥ずかしさは別格だ。

「さあ、真弓。好きなのを選んでいいわよ」

母親の語りかけに、周りの店員や客たちが目を丸くして振り返り――

(え？ あの娘さんじやなくて、あっちのお兄ちゃんの下着なの？)

(髪も長いし、足元も女児用のスニーカーだし、本当は女の子なのかしら？)

(でも、着てるのは高校の制服よね……男の子としか思えないけど……)

そんな彼らの心の声が耳に響いて来るかのようで、真弓はいっそういたまれなくなる。真っ赤になったままうつむいて黙っていると、

「どうしたの、真弓お兄ちゃん」

亜弓がニヤニヤ笑いながら、わざとらしく大きな声で話しかける。

「いつも穿いてるのと同じ、可愛い女児ショーツじゃん。お兄ちゃんが穿くものなんだから、恥ずかしがらずに選んじやいなよ」

「あ、亜弓……！ お、オレ、女の子の下着なんて……！」

「あははっ、隠さなくたっていいじゃん。あたしのよりずっと可愛い、ゴムが入ったお子様パンツを穿いてるくせに。ほら、こういうのが好きなんでしょ？」

「そ、それはっ……！」

妹が取り上げたのは、陳列棚の中でも特に幼いデザインのキャミショーツセットだった。ピンク地に、日曜の朝にやっている女児向けアニメのキャラクターがプリントされたもの。ふりふりぴっちりとした美少女戦隊衣装をまとった少女ふたりが杖を構え、マスコットの小動物が周りを飛んでいるイラストだ。サイズは130で、明らかに小学校低学年向けのものである。

「さ、さすがにそんなのは穿いてないから！」

思わず声に出してしまってから、はっと気づく。

(へえ、女の子用の下着を穿いているのは本当なんだ……)

周りからの好奇の目がいっそう強くなり、真弓はますますいたたまれなくなる。

(4)

そして、数分後。

「お待たせしました。商品をご確認いたします」

レジの店員はにこやかに挨拶すると、真弓がカウンターに置いた商品のバーコードを読み取ってゆく。

「プリティアキャミソールとショーツのセット、レース付きのソックス。以上2点で、よろしかったでしょうか？」

「は、はい」

「サイズもこちらでよろしいでしょうか？」

「は、はい……130なら、着られると思います……」

真弓が引きつった声で答える。店員が、好奇の色を隠しきれない目で見つめているのが分かったが、言い訳することもできない。

(うう、「あなたの下着なんだから自分で買ってらっしゃい」って、オレにレジにもっていかせるなんて……！)

(これならほんとに、最初っから女児服を着せられてたほうがましなくらいだった……！)

結局、妹に言われるまま女児用アニメ柄の下着一式——それとソックスを購入することになった真弓に言い渡されたのは、さらに羞恥に満ちた命令だった。

一つは、こうして自分の手で、下着をレジまで持つていって購入すること。かごに入れることも許されず、女児用下着を握りしめたままレジに並ぶのは、それだけでもじゅうぶんな辱めだ。ちなみに母親と妹は、少し離れた場所で真弓の買い物を眺めている。

そして、さらにもう一つの命令は——

「あ、あのっ」

「はい、何でしょう？」

「そ、その……商品に、着替えてから、行きたいので……そ、ソックスのタグをとって、試着室で、着替えさせて、もらえませんか……」

「え……」

さすがに予想外だったのだろう、店員は目を丸くして、じっと真弓を見つめる。

しかしすぐに、

「かしこまりました。それではタグをお取りしますので、試着室をご利用ください」

にんまりと笑ってタグを取ってくれた。

ともあれ会計を済ませた真弓は、タグを取ってもらった商品を手に、レジ横の試着室に入る。カーテンを閉めて一息つくと、逆に恥ずかしさがこみあげてきた。

(通報されるよりはずっとましだけど、ぜったい変態だと思われてる……！　いや、たしかに、女の子の服を着せられる妄想をノートに書いてオナニーしてたんだから、言い訳しようがないんだけど)

(うう、できればこのままずっと試着室に隠れていたい……)

(けど長居してたら、店員さんに「女児下着を穿いてオナニーしてるんじゃないかな？」って疑われそうだし、早く着替えて出でいかないと)

真弓は恥ずかしさをこらえて、改めて下着を取りだす。

(130サイズ……オレにはちょっと小さいけど、生地が伸びるから大丈夫……かな?)

(とにかく、まずは男子制服を脱いで――)

ブレザー、ズボン、ネクタイ、シャツを脱いで、ランニングシャツとトランクス、ソックスという男子用下着姿になる。

(これから着替えよう――ええい、もう、どのみち全部着替えるんだし、脱いじゃおう！)

ほとんどやけ気味に、真弓はソックスを脱ぎ、肌着を脱ぎ、トランクスを脱いで全裸になる。

そしてそのままの勢いで、プリキュアショーツを穿き、プリキュアキャミソールを着て、レースのついたソックスに足を通す――

「あ、ああ……着ちゃった……！　外で、女の子用の、下着セットを……！」

一面に貼られた鏡に映る、女児下着を着込んだ自分の姿を見て、真弓は戦慄に震える声を漏らした。

華奢な少年の体は、本来であればもう少し小さい体格の少女のために作られた下着をも受け入れていた。ややぴったりとして、キャミソールとショーツの間からおへそが覗いているのはご愛敬だが、問題のないレベルである。むしろ美少女めいた顔立ちと、背中まで届く長い髪のせいで、男子用の下着姿より様になっているほどだ。レースのついたソックスも、女の子らしさをいっそう演出する。

(でも、いくらなんでも子供っぽすぎるんじゃ……)

本来は幼稚園児から小学校低学年用の、アニメ柄下着。キャミソールの前側に描かれている美少女ヒロインのイラストを見ると、しかも――

「う、うわあ……」

鏡にお尻を向けてみると、そこにも女児向けアニメのイラストが。まるで本当に小さい女の子になってしまったかのように錯覚してしまいそうだが、棚に置かれた男子高校生の制服を見ると、自分の本当の年齢と性別を思い出す。

なにより、

(この上から、男子高校の制服を着て、試着室を出なくちゃいけないんだ……！)

コートの下は全裸で外を歩くような背徳の予感に――今まで大人しくしていた欲望が、ショーツの前で激しく疼き始めた。

(5)

「だ、だめだって……っ！ こんなところで、勃起したら……！ ゼッタイに射精するわけにはいかないんだから……！」

真弓は慌てて臍下丹田に力を籠め、立ち上がりそうになるペニスをこらえようとするが――時すでに遅し。普段は小さいくせに膨張率だけは一丁前な彼のせがれは、文字通り彼の手に余るほどの怪物に成長してプリティアショーツの中から飛び出し、剥き出しの亀頭と、血管の浮かび上がった竿をあらわにした。

「う、くう……もう、こうなったら、ヌかないと収まらないじゃんか……！」

少女のような体を女児用下着に包みながら、その股間からは隆々たる怒張を突き出していいる己の浅ましい姿を鏡に見ながら、真弓は覚悟を決めて竿を握る。

「―――っ！」

とたんに強烈な快感が脳天を直撃し、声にならない悲鳴を上げる。先ほどまで「絶対に射精するわけにはいかない」とイキっていた理性が、一瞬にして蕩けていた。

「んうっ……早く、早く、出さなきや……！」

つぶやきながら、少女のような手で荒々しい勃起をこすり始める。

あつという間に最大サイズに育っただけあって、すでに昂奮は射精に十分なほど高まっている。本格的な女装こそしていないものの、女児シューズで駅前を歩き回ったうえ、女児用下着を購入させられ、鏡の前で着用しているのだ。

今まで人目がある緊張から委縮していた息子は、試着室という密室に入ったことで安心したのか、一刻も早く射精させようと求めるように猛り狂い、我慢汁を垂れ流す。

それを軽く扱いてやるだけで、ジンジンと快楽の疼きが高まり、一足飛びの勢いで射精へと至ろうとする。

「い、いや、待って、ティッシュに出さなくちゃ——！」

右手で竿の根元を握って射精をこらえつつ、左手で脱いだ制服ズボンのポケットを探り、ポケットティッシュを何枚か取り出そうとするが、

「ダメだ、間に合わない——！」

真弓はプリティア下着から伸びる怒張を握りながら、この世の終わりのような表情で絶望の声を漏らす。ペニスは今にも暴発寸前。ティッシュを取り出していくは間に合わず、試着室を白濁液まみれにしてしまう。女児下着を購入する男子高校生を面白がっていたあの店員がいかに歪んだ性癖を持っていたとしても、許してはもらえないだろう。

(ええい、こうなつたら——！)

真弓は左手の手のひらで亀頭を包み込むと、右手をぐっと引いて——

「ん、あっ……！」

ドクッ、と竿が激しく脈打った次の瞬間、腰の奥から溢れだした大量の粘液塊が、尿道を押し広げるように出口に向かって殺到して、待ち構えていた掌底にたたきつけるように噴出した。

掌に広がる体液の熱さと、思考森性も消し飛ばすほどの強烈な快感に、

「お、おおお……！」

真弓は下品な声を漏らしながら射精し続ける。

手のひらに受け止めきれない量の精液が溢れそうになるが、とっさに器を作るよう手を丸めて防ぐ。しかし掌には、いまにもこぼれそうなほどの精液だまりが出来上がって、「はあっ、はあっ——ううっ、やっちやった……責めてティッシュに出そうと思ってたのに……」

射精を終えた今ごろになって戻ってきた理性に、ちくちくと罪悪感を責め立てられて、真弓はどんよりと暗い表情になる。

しかし落ち込んでばかりもいられない。萎えたペニスから今なお垂れている精液を左手で受け止めたまま、右手で多めのティッシュを取り出すと、左手を拭き、ペニスを拭き、フェイスカバーの袋を拵して包んでしまう。

「はあっ、はあっ……こんなことに使ってごめんなさい……」

真弓は絶頂の余韻が残る吐息を漏らしつつ、女児用下着の上から制服を着なおした。すぐに、鏡に映る自分の姿は男子のものに戻る。しかし、

(でもオレ、この下にプリキュアの下着上下を着て、レースのついたソックスを履いてるんだよな……)

ぞわっ、と背筋の毛が逆立つような感覚。またも疼く陰部に血が集まりそうになるのを必

死でこらえて、真弓は精液まみれのティッシュを包んだフェイスカバーを、トランクスやソックスごとランニングシャツで包むようにまとめて試着室を出た。

すぐ目の前には、待ち構えていた母親と妹。

「お帰り、兄ちゃん。ずいぶんゆっくりだったね」

「う、うん……ちょっと、着替えにてこずっちゃって……」

誤魔化すようにうなずきながらも、

(これ、オレが射精したの、バレてるのかな……?)

試着室に漂う青臭い匂いは、絶対に家族の嗅覚にも届いているはずだ。しかし二人は表情一つ変えておらず、気づかれていないのかと思ってしまう——が、

「さ、それじゃあ次のお店に行きましょうか。でもその前に——真弓はいったん、お手洗いに行ってらっしゃいね」

「う……うん……」

手を洗って来なさい——母親に言外にそう言われて、射精がばれていたことを知り赤くなる真弓。しかしすぐ、

「ちょ、ちょっと待って……次のお店って、いったい、どこに……?」

靴に、下着。

今日は本格的な女装はしないものと思っていた真弓は、これで恥ずかしい目に遭うのは終わりだと思いつつも、不安に襲われて尋ねた。

しかし母親は平然と、

「決まってるじゃない。靴に、下着と来たら——次はとうぜん、お洋服でしょ? 駅ビル6階の女児服売り場に行って、ゴールデンウィークの旅行のためのお洋服を、選ばないとね」

——この日の「お出かけ」は、ようやく折り返しに差し掛かったところであった。

(続く)